２０２４．１０．２０（日）使徒１９：２３～４０

19:23 そのころ、この道のことで、大変な騒ぎが起こった。
19:24 デメテリオという名の銀細工人がいて、銀でアルテミス神殿の模型を造り、職人たちにかなりの収入を得させていたが、
19:25 その職人たちや同業の者たちを集めて、こう言ったのである。「皆さん。ご承知のとおり、私たちが繁盛しているのはこの仕事のおかげです。
19:26 ところが、見聞きしているように、あのパウロが、手で造った物は神ではないと言って、エペソだけでなく、アジアのほぼ全域にわたって、大勢の人々を説き伏せ、迷わせてしまいました。
19:27 これでは、私たちの仕事の評判が悪くなる恐れがあるばかりか、偉大な女神アルテミスの神殿も軽んじられ、全アジア、全世界が拝むこの女神のご威光さえも失われそうです。」
19:28 これを聞くと彼らは激しく怒り、「偉大なるかな、エペソ人のアルテミス」と叫び始めた。
19:29 そして町中が大混乱に陥り、人々はパウロの同行者である、マケドニア人ガイオとアリスタルコを捕らえ、一団となって劇場になだれ込んだ。
19:30 パウロはその集まった会衆の中に入って行こうとしたが、弟子たちがそうさせなかった。
19:31 パウロの友人でアジア州の高官であった人たちも、パウロに使いを送り、劇場に入って行かないようにと懇願した。
19:32 人々は、それぞれ違ったことを叫んでいた。実際、集会は混乱状態で、大多数の人たちは、何のために集まったのかさえ知らなかった。
19:33 群衆のうちのある者たちは、ユダヤ人たちが前に押し出したアレクサンドロに話すよう促した。そこで、彼は手振りで静かにさせてから、集まった会衆に弁明しようとした。
19:34 しかし、彼がユダヤ人だと分かると、みな一斉に声をあげ、「偉大なるかな、エペソ人のアルテミス」と二時間ほど叫び続けた。
19:35 そこで、町の書記官が群衆を静めて言った。「エペソの皆さん。エペソの町が、偉大な女神アルテミスと、天から下ったご神体との守護者であることを知らない人が、だれかいるでしょうか。
19:36 これらのことは否定できないことですから、皆さんは静かにして、決して無謀なことをしてはなりません。
19:37 皆さんは、この人たちをここに連れて来ましたが、彼らは神殿を汚した者でも、私たちの女神を冒瀆した者でもありません。
19:38 ですから、もしデメテリオと仲間の職人たちが、だれかに対して苦情があるなら、裁判も開かれるし地方総督たちもいることですから、互いに訴え出たらよいのです。
19:39 もし、あなたがたがこれ以上何かを要求するのなら、正式な集会で解決してもらうことになります。
19:40 今日の事件については、正当な理由がないのですから、騒乱罪に問われる恐れがあります。その点に関しては、私たちはこの騒動を弁護できません。」こう言って、その集

まりを解散させた。

＜説教＞

パウロの第３回伝道旅行の途中、エペソでのパウロの働きを私たちは見て来ました。最初ユダヤ人の会堂で３ヶ月、次にティラノの講堂で２年間、パウロはひたすら神の国について、主イエス･キリストについて論じ、人々を説得しようと努めました。それで、〈アジアに住む人々はみな、ユダヤ人もギリシア人も主のことばを聞いた。〉(10)、〈神はパウロの手によって、驚くべき力あるわざを行われた。〉(11)、〈みな恐れを抱き、主イエスの名をあがめるようになった。〉(17)、〈主のことばは力強く広まり、勢いを得ていった。〉(20)、ということになりました。パウロの宣教を通して神の力が、神の国の力が、主のことばの力が充分に現されました。〈この道〉なる主イエス･キリストに、パウロが〈余すところなく…伝えた〉(20:20)イエスの福音そのものに力が充ち溢れていたのです。

そんな「満たされた」エペソ伝道に一区切りをつけたパウロがそろそろマケドニアに向けて出発しようかという時に、本日の聖書箇所(23−40 節）に記されている〈大変な騒ぎが起こ〉りました(23)。それはエペソの〈町中が大混乱に陥〉るほど(29)、人々の〈集会は混乱状態〉(32)になるほどの大騒動でした。

なぜそんなことが起こったのでしょうか。パウロが語った主のことば、イエスの福音、神の国の福音が誤っていたから、悪かったからでしょうか。そうではありません。正反対です。正しかったからです。パウロの語った福音が正しく力に充ちていたから、主のことばに力があり、聖霊がともにお働きになったからです。そういうときこそ悪魔もまた必至に妨害しようと働いたからです。人間の罪、肉の欲、貪欲（むさぼり）が福音を拒絶したからです。

この騒ぎの仕掛け人が〈デメテリオという名の銀細工人〉でした。彼は〈銀でアルテミス神殿の模型を造り、職人たちにかなりの収入を得させて〉いました(24)。〈その職人たちや同業の者たち〉はその仕事のおかげで商売繁盛していました(25)。エペソには女神アルテミスの神殿があり、エペソは〈偉大な女神アルテミスと、天から下ったご神体との守護者〉(35)たる町と言われていました。「アルテミシオンの月」（４月ごろ）には大祭が開かれ、アジア中から多くの巡礼者が集まりました。ちょうどその時期と重なったのかもしれません。デメテリオは神殿模型の売り上げ金額がかなり減ったことに気付いたのでしょうか。その原因を考え、それはパウロの宣教だと結論付けたのです(26)。このデメテリオの見立ては確かに当たっていました。「手で造った物は神ではない」とパウロが言っているとは、かつてアテネで「この世界とその中にあるすべてのものをお造りになった神は、天地の主ですから、手で造られた宮にお住みにはなりません」とパウロが言った(17:24)ことをも思い起こさせます。アテネでもエペソでも、どこででもパウロはそのように人々に教えたに違いありません。エペソでは〈信仰に入った人たちが大勢…自分たちのしていた行為を告白し…魔術を行っていた者たちが多数その書物を持って来て、みなの前で焼き捨て〉ることが行われていました(18−19)。それを考えると、やはり「パウロによって説き伏せられ、迷わされた大勢の人々」が、殊に信仰に入った人々が、神殿模型も壊し、焼き捨てるということも行われたのかもしれません。〈この道〉とは要するにイエス・キリストのことだと前に言いました。しかし同時に〈この道〉とは、その主イエス･キリスト

を信じ、まことの神、天地万物の造り主なる唯お一人の神を信じる人、キリスト者が、口先だけの告白ではなく、実際の生活と行いでも信仰を告白して歩む道です。後に書かれる「エペソ人への手紙」で次のようにパウロは言います。〈実に、私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをあらかじめ備えてくださいました〉（エペソ 2:10）。〈主にあって厳かに勧めます。あなたがたはもはや、異邦人がむなしい心で歩んでいるように歩んではなりません〉（同 4:17）。〈あなたがたは偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい〉（同 25）。〈怒っても、罪を犯してはなりません〉（同 26）。〈盗みをしている者は、もう盗んではいけません。むしろ、困っている人に分け与えるため、自分の手で正しい仕事をし、労苦して働きなさい〉（同 28）等々。「エペソ人への手紙」が書かれたのは、このときの第３回伝道旅行からはなお何年か後ですが、とにかくそういう実際の〈良い行いに歩む〉生活と行動が、キリスト者の生きる新しい道です。神がパウロの福音宣教を用いて〈この道〉を歩み始める多くの人々をエペソに起こしてくださいました。その人々が女神アルテミスとその神殿の模型を捨てて真の神を礼拝し、イエス・キリストを証する生活を歩み始めました。パウロと同じように「手で造った物は神ではない」と証し始めました。彼らがパウロによって〈説き伏せ、迷わせ〉られた結果でした。

それを〈見聞きして〉デメテリオも〈説き伏せ、迷わせ〉られればよかったのですが、そうはなりませんでした。何が真理、正しい道かを考えるのではなく、自分の〈仕事の評判が悪くな〉り(27)、〈かなりの収入〉が減ることだけを心配しました。アルテミスとその神殿のことも口では心配していますが、それより何より自分の金儲けの邪魔をされたことに〈激しく怒〉(28)ったのでしょう。それは〈職人たちや同業の者たち〉も同じでした。大混乱に陥った人々が一団となってなだれ込んだ劇場(29)は〈裁判〉(38)や議会、市民集会の場でもありました。パウロの同行者のうちの二人が捕らえられてしまいました(28)。その後を追って会衆の中に、劇場に入ろうとしたパウロは弟子たちにより、また友人たちによって制止させられました(29-31)。この場合は神が彼らを用いてパウロの身をお守りになったと見るほかありません。

人々の集会の混乱状態はもう分けが分からないものでした(32)。そんな人々を静め、弁明しようとユダヤ人アレクサンドロが試みましたが無駄に終わり、「偉大なるかな、エペソ人のアルテミス」との群衆の叫びが２時間ほども続きました（33-34)。そこで、やっと〈町の書記官が群衆を静め〉て説得を始めました(35)。彼はキリスト者ではありませんでしたが、冷静に群衆に語りかけて騒ぎを静めました(35-36)。パウロたちについても取り敢えずは悪くは言わず、弁護しているようです(37)。何よりも事の起こりは〈デメテリオと仲間職人たち〉たちが儲けられなくなったという「個人的恨み」にあることを見抜いていました。だからもし〈誰かに対して苦情があるなら〉法律に則って正式に要求し解決するように、そうでないと騒乱罪に問われる恐れがあると忠告し、そうして集会を解散させました(38-40)。キリスト者でもない、むしろ偶像礼拝を認めている(35)ような〈町の書記官〉でしたが、この場合はきちんと正しく権威を行使し、民衆の大騒ぎ、混乱状態を収めました。神は彼を〈神のしもべ〉（ローマ 13:4)としてお用いになり、神のみこころを行わせ、パウロたちを悪魔の攻撃から守り、お助けになりました。

私たちも、同じくこの異教の地にあって、この力ある神に、正しく力に充ちた主のみこ

とばと聖霊の働きに全く信頼して、〈この道〉を堂々と歩んで行きたいと願い祈ります。